

## 尹志平時代における全真教の拡張：山西地方の世侯との交流を中心に

著者	孫 翔宇
雑誌名	文化
巻	79
号	3,4
ページ	17-34
発行年	2016-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/63839">http://hdl.handle.net/10097/63839</a>

文化 第七十九卷 第三・四号 | 秋・冬 | 別刷  
平成二十八年三月二十五日発行

# 尹志平時代における全真教の拡張

—山西地方の世候との交流を中心に—

孫  
翔  
宇

# 尹志平時代における全真教の拡張 ―山西地方の世侯との交流を中心に―

孫 翔 宇

## はじめに

いわゆる新道教の中心的な宗派である全真教は、金世宗大定七年、南宋孝宗乾道三年（西暦一一六七）王喆（重陽）によって山東寧海州（今の煙台市牟平区）に創唱され、それ以来、馬鈺（丹陽）、譚処端（長真）、劉処玄（長生）といった門弟の努力により、少しずつその活動範囲を拡げていた。その後、王処一（玉陽）が金朝の世宗や章宗に招かれ、王朝の支持を受けると、教団の勢力は伸張し<sup>（一）</sup>、丘処機（長春）の時代に入ると、彼は金国の北方に勃興したモンゴル帝国とも接触し始めた。そして金宣宗の興定四年、南宋寧宗嘉定十三年（一二二〇）前後、長春はチンギス・カンに招かれ、歴史上で有名な「西遊」を開始した。このチンギス・カンとの会見の後、全真教教団は未曾有の繁栄を迎え、教線は一気に伸張し、信者

も大いに増えることになった。

金哀宗正大四年、南宋理宗宝慶三年（一二二七）、丘長春が逝去すると、彼の門下である清和真人尹志平が教団の事業を引き継いだ。当時すでに教団の指導体制は整備されており、かれは王重陽から数えて第六代目の教主、すなわち掌教に就いた。一方、モンゴル王廷にも変化が発生しており、オゴデイ・カアンが新たなモンゴル大カアンに即位した。彼はチンギス・カンの志を継承し、金国を進攻し続けるかたわら、全真教教団に対しては支持を続けた。尹志平も全真教教団を率いて教線の拡張を継続し、丘長春が功績を残した燕京を拠点にしつつも、モンゴル帝国の新領土でありまた全真教教団としては新天地である山西地方へ進出し始めた。

十三世紀初頭、チンギス・カンが金朝に対して全面戦争を發動して以来、中国華北地方は大混乱に陥り、この地域は、金、モンゴルと南宋三方の勢力が競い合う戦場となった。その戦場では、漢人世侯によって率いられた武装集団が活躍した。彼らはモンゴル勢力に従属し、モンゴルの華北征服に参加するとともに自分の独自の役割をも果たしたのである。

「世侯」（漢人世侯）という言葉は愛宕松男氏が提唱し、モンゴル時代のチンギス・カンの時期からクビライ・カアン の 時期 に いた る ま で、中国華北地方の民衆が自衛のために作った武装自衛集団の、そのリーダーとなった漢人有力者を指す。彼らは十三世紀初頭に中国華北地方における混乱の收拾と秩序の再建に貢献した。愛宕氏は、この分野の最初の研究論文である「李璫の乱と其の政治の意義―モンゴル朝廷下における漢地の封建制とその州県制への展開」において、世侯を如上理解したうえで、世侯が出現した歴史的な意味をも論じ、さらには数十名の「世侯」を含めた「漢人世侯分布表」を作成した<sup>(2)</sup>。ついで池内功氏は、愛宕説にもとづきつつ、「漢人世侯」を「封建領主の如き」、「在地における自衛集団」と解釈するとともに、世侯の在地性を検討し、愛宕氏の「漢人世侯分布表」を修正して「金末元初有力投降者の分布」という表を作っ

た<sup>(3)</sup>。また、符海潮氏と胡小鹏氏両氏も世侯の定義について検討した<sup>(4)</sup>。

一方、全真教教団の山西における布教について、藤島建樹氏は、その教線拡張の成功を外護者の存在に帰結しており、漢人世侯の支持にも言及した<sup>(5)</sup>。また瞿大風氏はモンゴル時代の山西地方を総合的に検討し、山西地方の在地の世侯をも研究し、王霞蔚氏も山西平遥梁瑛一族の歴史を論じている<sup>(6)</sup>。しかし、藤島氏の論文は教団の「外護者」全般には注目するものの、世侯の貢献に関しては検討の重点を置かず、当然、世侯個人の全真教信仰も考証していない。また瞿大風氏と王霞蔚氏の研究は、この土地の各家族の歴史と政治の面に集中しており、彼らと全真教教団との交流には考察が及んでいない。

そこで筆者は、本稿において全真教教団の山西伸張を検討するなか、特にこれまでの研究において見逃されてきた世侯との交流の史実を考証し、その全真教信仰の実態を明らかにしたいと考える。世侯の支持が、尹志平時代における全真教の山西地方の伸張に対して如何なる役割をしていたのかを検証することが、本稿の目的である。ただしその具体的検討に入る前に、まずは尹志平の前半生について、概略、確認しておきたい。

## 一、尹志平時代の全真教

### 1、尹志平と丘処機

清和真人尹志平には、その詩集である『葆光集』三卷や、弟子たちとの問答などを収録した『清和真人北遊語録』四卷があり、それらからは、彼における思想形成の痕跡や、その思想内容などを知ることができる。詩集はその巻頭に載る「己亥」歳（一二三九）執筆の煙霞逸人による序文によれば、尹志平の自編であり（『道藏』第二五冊、文物出版社、上海書店、天津古籍出版社、一九八七年合同影印版、以下『道藏』はこのテキストに拠る）、一方、語録は彼の弟子である段志堅の編纂であって、その巻頭に李進、張天祚、李志常三氏の序文が附く（同第三三冊）。その序文の執筆時期は、前両者が「丁酉」歳（一二三七）、後一者が「庚子」歳（一二四〇）である。

尹志平の生涯は、右の編著や幾つかの序文などによっても明らかにになるのだが、それら以外にも、彼の功績を書き記した碑文が複数、残っている。現在それらは、陳垣氏が編纂した『道家金石略』（陳智超・曾慶瑛校補、文物出版社、一九八八年）に収録され、容易

に繙読が可能である。その代表的なものを年別順に並べると、戈穀の「清和妙道広化真人尹宗師碑銘並序」（同書五六七頁、「芸拓」、『甘水仙源録』卷三…『道藏』第十九冊）、賈鍼の「大元清和大宗師尹真人道行碑」（同書六八〇頁、『古樓觀集』卷中…『道藏』第十九冊）および王惲の「大元故清和妙到廣化真人玄門掌教大宗師尹公道行碑銘並序」（同書六八九頁、『秋澗集』卷五六）、李志全の「清和演道玄德真人仙跡之碑」（同書五三八頁「芸拓」）である。以下、これらの碑文に基づき、掌教に就くまでの彼の前半生を概観しておく。

元代の文人である賈鍼 が撰した「大元清和大宗師尹真人道行碑」（以下、「賈碑」と略称する）には、

師（尹志平）以金大定九年（一一六九）正月二十日生、性有宿慧。甫三歲、善記古事。五歲入学、日誦千言。十四歲遇丹陽真人（馬鈺）、遽欲棄家入道、父母難之、往復三返、始從其志。初往菴昌邑、夢長生劉真人（劉處玄）、斷手刳心、使其玄解。後立觀棲霞、侍長春丘真人（丘処機）、提耳面命、付以微言。繼又受易於太古（郝大通）、得談於玉陽（王処一）、真理融會、心光燁然。由是道望日隆、為學者師法。歲己卯（一一九五）、太祖聖武皇帝（チンギス・カン）特頒綸音、起長春真人於海

上、選名德以輔行、得十八人、師為之冠。

とある。この記載から見れば、尹志平は生まれながらに聡明であり、十四歳の時馬丹陽と会って全真教に入道しようと欲した。その後、それに反対する両親を説得し、ようやく志を遂げたようである。これが彼にとっての全真教教団との出会いである。ついで彼は夢に劉処玄と会ったと記録されるのだが、この点について戈穀の「清和妙道廣化真人尹宗師碑銘並序」（以下、「弋碑」と略称する）は、「或一夕、見長生劉真人飄然而來、斷其首、解剖其心、復置之、覺而大有所悟……」とその不思議な経験を具体的に記し、一方元初の全真道士である李道謙は、その『終南山祖庭仙真内伝』（『道藏』第十九冊）卷下「清和真人」に、この「一夕」の出来事の一段の前に、「（十九歳）詣武官靈虛觀長生宗師席下、執弟子礼。」との一文を置く。李道謙は、尹志平の履歴をたどる上で、一種の合理的な解釈を行ったと考えられる。

その後、尹志平は、丘長春、郝太古、王玉陽から相繼いで教えを授かった。この点については『清和真人北遊語録』（以下、『語録』と略称する）卷二にも

吾（尹志平）生於大定九年（一一六九）、十年（一一七〇）祖師（王重陽）昇、是以不得親奉、以次師真、皆所親奉、太古師（郝大通）特為我說

易、皆世所未聞。玉陽師（王処一）握吾手談道妙、長春師傳（丘処機）所授、不可具述……

と記される。即ち彼は郝太古からは『易経』関する世間では知られない知識を教わり、王玉陽とは共に道を論じるほどであり、さらに丘長春からは、数えられないほど多くの教えを授かったわけである。以上、尹志平は「全真七子」の中の重要人物から教えを受けたことが分かる。

さて、前掲の「賈碑」に「道望日隆」とあるとおり、彼はすぐれた全真高道に成長し、その興望も高まるわけだが、そもそも丘長春がチンギス・カンに招かれて行った「西遊」において、彼はなぜ、それに参加した「十八人の弟子」の中で、最も優れた人物（冠）だと称されるようになったのだろうか。

尹志平は丘長春から、かれの「積功累行」という思想を受け継いだようである。この点について、『語録』卷三には

丹陽師父全行無為古道也、至長春師父、惟教人積功行、存無為而行有為、是執古道為紀綱、以御今之所有也。

とある。そもそも馬丹陽は「無為の古道」を実践していたわけだが、一方、丘長春にいたると、彼はその「無為」の意図を内に含んだ形で「有為」の実践

を重視し、それを「功行を積む」こととも表現したようである。尹志平もそれに倣ったのであり、この「無為」と「有為」との一体の関係について、同書の巻一でも

師父（丘長春）曰、有為無為一而已、於道同也。

如修行人全拋世事、心地下功、無為也。接待興緣、求積功行、有為也。心地下功、上也。其次莫如積功累行。二者共出一道、人不明此、則不能通乎大同、故各執其一相為是非、殊不知、一動一靜、互為体用耳。

と記している、即ち丘長春は「無為」でも「有為」でも「道」という観点においては同一だと看做した上で、世事とは関わらない、「修行人」の実践は確かに「心地」を養う上等の実践だが、世間との交渉の中で「功を積み、行を重ねる」実践も「道」の「体用」関係から考えれば、評価に値すると捉え、むしろその実践を推奨したわけである。

尹志平自身、『語録』巻一に「今日教門大開、積果功行、正其時也。便当有為、為入道基本」と見えるとおり、丘長春の言う「功行を積む」実践こそが、彼の時代において必要な事柄だと考えた。さらに、『語録』巻二が、

学其未覚、恵也、功也。弘揚教法、接物利生、行

也。積功累行、為道基本、絕学遺法、乃可入於道と説明するように、それこそが全真教の「教法を弘揚する」方法であった。このような彼の教法理解に対して、丘長春はみずからの教えを最も良く受け継いでいると判断したと思われるのである。

丘長春が「西遊」を開始する前に、尹志平はかれに對し、「將以斯道覺斯民、今其時矣。」と進言してもいた<sup>(8)</sup>。これもまた、丘長春と尹志平が全真教をモンゴル王廷に宣伝し、教団の影響力を広げる必要があるという点で合意していたことを表すエピソードなのであり、「積功累行」の思想を、彼らはそのようにして体現したと考える。「西遊」を終えた後、丘長春はモンゴル軍の南下に際し、山東地方の百姓を救うべく尹志平を遣わした。その時の情況は、『祖庭仙真内伝』巻下「清和真人」に、

(一一三三)

還及雲中、長春聞山東乱、天兵（モンゴル軍）又南下、曰、彼方生灵、命懸砧鼎、非汝莫能救。因遣師（尹志平）往招慰、聞者衆附、所全活甚多。

と記録される、尹志平は、モンゴルの侵攻の中で多くの民衆の命を救ったのであり、「積功累行」という丘処機の掌教としての原則、即ち当時における全真教教団の主旨は確かに尹志平に受け継がれて、彼の布教活

動の原則ともなった。そしてそれが、全真教教団の全国拡張の基礎となったわけであり、この点から言うならば、丘処機が尹志平を自分の後継者として選んだのは慧眼であった。

## 2、尹志平とモンゴル王廷

尹志平は丘長春に信頼されたのみならず、同時にモンゴルの大カンにも認められていた。「戈碑」には、尹志平は太宗四年（一二三二）、初めて順天（今の保定）においてオゴデイ・カアンと会い、正式にモンゴル王廷に認められ、名号を賜わったと記される。そしてオゴデイ・カアンは自分の皇后（可敦）である脱列哥那（ドレゲネ）を自分の代わりに長春宮（天長観）に派遣し、「祀香」を行わせたとあり、さらに、太宗六年（一二三四）、金を滅ぼした年に、皇后脱列哥那可敦（ドレゲネ）は尹志平を慰労するため使節を遣わし、「大金玄都宝藏」という重要な道教経典を下賜したという<sup>9)</sup>。

こうした経歴は、かつて金の章宗の時代、章宗が丘処機に道藏の一部を下賜したその行為を踏襲するものであり、この点からも、尹志平がモンゴル王廷に認められ、全真教教団が莫大な信任と受けたと看做すこと

ができる。

また、李志全所撰の「清和演道玄徳真人仙跡之碑」（以下「李碑」と略称する）には、その二年後の太宗七年（一二三六）、彼はその高足李志常とともに「雲中（今の山西大同）」においてオゴデイ・カアンからの聖旨を拝聴している。それによれば、モンゴル王廷は全真教教団に対し当時の帝国の首都、カラ・コルムに道観を建てさせ、高道を選んで住持させようと命じたのである<sup>10)</sup>。

これらすべてはオゴデイ・カアンの尹志平ないし全真教教団に対する信頼と支持の心をも示している、おそらく王廷は、全真教教団が持っていた税糧優免という特権をも、引き続き承認したのであろう。かくしてオゴデイ・カアン時代に至っても、全真教教団とモンゴル王廷の関係は相変わらず密接であり、特に尹志平個人の力量がモンゴル王廷との関係を一層緊密にさせたと推察される。

## 二、尹志平と各地の世侯の交流

さて、尹志平の山西布教はどのように行われたのだろうか。全真教教団は、既に金朝期においても、山西において世侯と交流を持っていた。金末の有名な文人



である元好問が撰した「朝元観記」(元好問『遺山先生文集』卷三五)には、全真道士梁思問と崢山(今の中国山西省崢山)の在地世侯、閻德剛と閻德鎮父子との交流が記録されている<sup>(1)</sup>。すなわち彼らは梁思問の宣教を支持し、崢山に道観を建てたのである。

一方、尹志平は掌教就任の約七年後、モンゴル帝国が金朝を打ち倒したその次の年に山西布教を果たした。前掲の「李碑」などに「乙未(一二三五)春、西入汾晉(今の山西)……と見えるとおりである。上述のとおり、その前年に彼は、モンゴル皇后から道蔵を賜予されており、彼の山西布教には、中国支配を宗教的側面において強めようとするモンゴル王廷の意向が反映していた可能性がある。この点が、金朝における前例との大きな差異である。

山西での彼の布教活動に関しては、右の「李碑」に、  
乙未(一二三五)春、西入汾晉、赴沁帥杜德康  
請、於平遙県玉清観作大醮、多致感応。有万戸  
梁公、久欽道價、即奉施本県清虚観。師増修粉  
飾、勝於往日、更爲太平興国観。是冬、平陽府李  
侯率僚属車馬來迎、請演教於長春観。官民寓庶、  
日送供者、旁午於道……真常(李志常)從燕來接於  
雲中、共聽聖旨、令選天下高道……是時忻守張侯、  
自出己財、独建重陽観……

という記載がある。ここで着目したい事柄は、この記事の中に、彼と交流した世侯として、「沁帥杜德康」、「萬戸梁公」、「平陽府李侯」、「忻守張侯」という四人の名前が記されていることである。従来、この四人との交流の実際に関しては、十分な検討が行われてこなかった。そこで本稿は、以下、尹志平とこの四人との交流を可能な限り詳細に考証し、それらを通して、尹志平による布教活動の実態に迫りたい。

### 1、沁帥杜德康

乙未(一二三五)春、山西に入った尹志平は、まず平遙県において沁帥杜德康の要請に応じ火醮を主宰した。杜德康にとって道教の祭祀が身近な行為であったことを示唆する記事でもあるが、そもそも沁帥杜德康とは、どのような人物であるのだろうか。

中国河南省済源市に「大紫微宮」というモンゴル時代から残っている全真教の道観があり、そこには一つの石碑が立てられている。石碑の内容は二つの部分に分けられ、上段はモンゴル王室から発給された懿旨が、下段には李志全が撰述した「天壇十方大紫微宮結瓦殿記」と題する文章が刻まれている。この碑文について、蔡美彪氏は『元代白話碑集録』において

「一二四零年濟源十方大紫微宮聖旨碑」として考証し<sup>(12)</sup>、一方、陳垣等著『道家金石略』は懿旨と「結瓦殿記」とをその四八〇頁以下に、李修生等著『全元文』巻二は「結瓦殿記」だけを収録する。その立石は、懿旨に対しては「庚子（一二四〇）年三月十七日本宮道士錢志通摹勒上石」とあるが、「結瓦殿記」の撰述は「大朝歲次庚戌八月日」であることから、庚戌（一二五〇）以降である。

興味深い事柄は、「結瓦殿記」の末尾に、大紫微宮「三清大殿」の瓦を葺き、その姿を「円備」させるべく布施をおこなった檀越として、「結瓦琉璃殿功德主夫人悟真散人王体善、結瓦琉璃殿功德主沁州長官保安居士杜德康」とあり、かれらの行動に関連して、かれら自身の言葉として「某等昔年欽奉朝旨、令提領雕造三洞藏經、兼修建諸宮觀事、素有增飾上方念」と記録される一方、懿旨には、「拋沁州管民官杜豐雕造道藏經並修蓋等事、可充提領大使勾当者。你不得功夫時節、你的娘子充提領勾当者」と記されていることである。行動の内容が同一であることから、尹志平が交流をもった杜德康とは、そもそも杜豐と称する人物であったことが推定される。なお懿旨に言う「你的娘子」とは杜豐の夫人であり、「結瓦殿記」に言う王体善がその女性に相当する。

「結瓦殿記」には「杜侯一門、自於長春國師幾前親受法訓」とあり、その一族が「汾州平遙県」の人士であること、および王夫人に関しては「平陽府録事司」の娘であることが記される。清代康熙時代の王綬が編纂した『平遙県誌』巻七「芸文志」（清康熙四十六年刻本）は、そのなかに元代の文人郝天挺の撰した杜豐一族に関する「杜氏孝感泉記」という文章を収録し、「太原平遙孝感泉者、出於本県西汾村里杜氏先塋之側」と記したうえで、この泉が掘られた事情を、「沁帥便宜夫人王氏之所指而鑿者也」と述べ、その帥の諱を「豊」と記す。

杜豐すなわち杜德康とは、まさしく平遙杜氏の一員であったわけである。さらに右の「杜氏孝感泉記」は、金末兵乱、以材勇保拋沁州、国初、人附累從戰伐、所破城柵全活万計、朝廷授以虎符、金吾衛上將軍、絳軍節度使、沁州都元帥便宜行事。其本州所隸親王亦有旨賜以沁陽公之号

とも述べる。つまりかれは、沁州長官に就く以前から、この土地一帯の保安に心を砕く人士であり、その後、モンゴル王廷から、かれによる地方支配の実態に合致した称号を賜与されたとみなせるだろう。そもそも杜豐という名前は、愛宕松男氏の「漢人世侯分布表」に見えるのもであった<sup>(12)</sup>。

元代の文人李鼎が撰した「大朝宣授沁州長官贈沁陽公神道碑銘並序」（光緒『平遙県誌』卷十一所収）には、

辛卯（一二三二）、至自行在、奉旨治沁……、自下車至庚戌（一二五〇）二十年間、撫字之術、不一而足、……丁未（一二四七）、致仕、長子思明嗣之。公由是杖履蕭然、自得於塵氛外、日與有道之士談論奧妙而已。

とあり、一方、康熙『平遙県誌』卷五「人物」には、「乙未（一二三五）、陞沁州長官、長官者、元初高爵也。在沁十餘年、寬役薄賦、勸課農桑」と見える。杜豊は、辛卯歳（一二三一）にモンゴル王廷の命令を奉じて沁州を管理し始め、乙未歳（一二三五）に沁州長官に昇任し、合計二十年にもわたる長い期間、この地の民心の安定に壮年期をついやしたことがわかる。また致仕後のかれは、穏やかな信仰生活を送っていたようである。その生没年に関しては、「杜氏孝感泉紀」に「乙卯（一二五五）夏五、薨、年六十六、遺命還葬西汾州祖塋」と記される。金朝章宗元年（一一九〇）歳の出生である。

なお康熙『平遙県誌』卷五「列女」には、杜豊の夫人について

王氏、杜豊夫人。平陽鋸族女、性仁儉、多才智……、修永昌會真庵、龍山昊天觀、燕京白雲觀、沁

州神霄宮、天慶觀、集仙觀、元都觀、版刻道藏、……佐夫為善、教子成材、号保安居士

とある。杜豊の夫人王氏が平陽（今山西臨汾）の出身であり、沁州を中心とする各地の道觀の修復に携わり道藏を彫刻したと記されるが、その内容は、前掲の「結瓦殿記」および令旨の記載に一致する。

次に、杜徳康（杜豊）と全真教との関係についてその実態を明らかにしたい。前掲の「結瓦殿記」によれば、そもそも杜氏一族は、長春真人丘処機から「法訓」を授与されたように、全真教の信者であった可能性が高い。一方、康熙『平遙県誌』に載る杜豊夫人の伝記中、燕京白雲觀修復の記事からは、彼女もまた丘長春の時代から全真教と関係を保っていた可能性がある。そうした杜徳康夫婦が大紫微宮の修復に出資したのは全真教道士であり紫薇宮の副提点、李志昭の願いに応じたからである。その理由に関連して李志昭は、「道衆」に対し、「僕往年於沁州杜長官暨王夫人処得施物狀、奉道多年、盟心喜舍、曾許王、杜二仙官所主小有洞天結縁」と述べる。「聖賢の陰祐」を請うべく、杜家を訪ねた模様である。杜氏一族と全真教団との宗教的にして経済的な結びつきが、継続的に存在していたことがわかるだろう。

（杜豊）杜徳康が尹志平の詩集『葆光集』を刊行する

際にも、序文に「唯沁州長官杜德康、為当世賢者也。一見此集、普願衆聞、遂募工鏤板、以広其伝」<sup>(13)</sup>とあり、また『語録』の序文にも「沁郡長官杜德康將大書鈐木、与四方信士、林泉幽人共之」という記載があるとおり、杜德康（杜豊）が出資者となっていた。尹志平による布教活動を、かれは出版物の刊行というかたちで後援したことが推察される。

また、李道謙による『終南山祖庭仙真内傳』巻下「清和真人」には、「乙未春（一二三五）、沁州牧杜德康請師（尹志平）主黄箓醮事、師由雲応南下、所至原野道路、望塵迎拜者日千万計」とある。尹志平が玉清觀において「黄箓醮」を行うために雲州（今の太原）から南下すると、彼を迎えに来た信者たちが毎日数万人に至ったわけであり、かれに対する民間の人々の期待の大きさがわかる。

この道醮については、前掲の「戈碑」が、「乙未春、詣沁州、主黄箓醮事、……及平遙理醮事、時旱久且風、醮之三画夜、燈燭恬然、在他境猶風。沁帥杜德康、平遙帥梁瑜、各施宮觀、一方傾心焉」と記すように、醮祭を行っている間は、蠟燭の焰も風に影響されず安定していたこと、沁帥杜德康、平遙帥梁瑜がそれぞれ宮觀に援助し、土地の人々が全真教に心を寄せたと表現されるように、土地の支配者は、尹志平の神秘

的な道力を信じ、かつその信心をもって土地の民心を安定させようとしたことが推察される<sup>(14)</sup>。ちなみに「李碑」は、この儀式が行われた後に続いて「沁州杜帥又施神霄宮、増広堂廡」と記している。すなわち、杜德康はこの後神霄宮に寄付して修繕したことが分かる。

杜德康と尹志平のあいだには、詩のやり取りもある。たとえば尹志平が沁州を去る時、かれは「依韻別沁州長官杜帥」を題目として詩を書き、別れを惜しんだ。両者の親密な関係が分かる<sup>(15)</sup>。前掲のように杜德康（杜豊）はモンゴル王廷の命令を奉じて三洞藏經を彫造したわけだが、「戈碑」によれば、実際に彫造を担当していたのは尹志平の同門、披雲真人宋德方である。すなわち「九月達平陽、分命披雲宋公率衆鑄道藏經板、不数載而完、所費不貲、而人樂成之、亦師為之張本」と記されるとおりである。「所費不貲」という言葉から推察されるように、刊行に際しての莫大な資金は、杜德康（杜豊）が出資したことが想定できる。

なお三洞藏經の彫造の意義について、陳垣氏は『南宋初河北新道教考』（中華書局、一九八九年、北平輔仁大学一九四一年刊行本）に、これは尹志平などの全真道士が教団の未来の発展のため種を残そうとした行為だと指摘している。陳氏が推察する意図について異議

はないが、世侯の立場から見ると、これは全真教教団に対するかれらの信頼の証しでもあると言えるだろう。

## 2、萬戸梁公

尹志平は乙未歳（一二三五）に沁州に到着し、杜氏一族と会って齋醮儀式を行った後、「萬戸梁公」と会っている。「李碑」の表現を借りるならば「有萬戸梁公、久欽道價、即奉施本縣清虛觀」であり、杜氏一族と同様、梁公もまた、かねてより全真教を篤信していたようである。かくして尹志平は、「増修粉飾、勝於往日、更爲太平興國觀」、すなわち平遙県の「清虛觀」を修繕して「太平興國觀」に改めた。

この「萬戸梁公」について、清代の胡聘之が編纂した『山右石刻叢編』巻二十四には、癸丑歳（一二五三）に作成された清虛觀の改名に関する「太平崇聖宮公扈」が収録され、そのなかの一段に、以下のような記載がある。

今自大朝興國以來、為本宮兵革之後、殿宇房屋、全無損壞、因此有本県長官梁瑜並万戸梁瑛等、經詣本府、乞改名額為太平興國觀、各有已立碑記。

即ち「清虛觀」を「太平興國觀」に改めたのは主に

「平遙県の長官、梁瑜と万戸梁瑛である。さらに『平遙県誌』には、元代文人張藻が書いた「評事梁公墓碑」（巻七「芸文志」）が掲載されており、梁氏一族の開祖は梁秉鈞という人物であり、その長男が梁瑜、三男が梁瑛であつて、梁瑜は平遙県令に就き、弟梁瑛は万戸であつたと記される。また、癸丑歳（一二五三）の時に梁瑛は既に「五路万戸」であつたとも記されるように、「萬戸梁公」が梁瑜の弟、梁瑛であることは間違いない。<sup>16)</sup>

そもそも梁瑛も、前掲の杜豊と同じく山西平遙の出身であり、愛宕氏の「漢人世侯分布表」にも入っているのだが、世侯としての梁瑛の経歴については、『元史』（巻二六四）本伝に詳しい。彼も多くの世侯たちと同様、金末の乱世に自衛のため、民衆を集め、後にモンゴル軍に降参した。彼はモンゴル軍に投降した後、「元帥左監軍」に任じられ、後にモンゴル軍とともに転戦し、最終に「行都元帥」に封じられ、平遙県の最高長官になった。一二二九年に、彼はオゴデイ・カアンに拝謁し、「御前千戸」を授けられた。その後、彼は戦功を挙げ、最終に「五路万戸」として山西省全体を管理して一地方の世侯に成長した<sup>17)</sup>。

梁氏一族が尹志平の山西布教を支持した史実については、清虛觀を修繕して名前を太平興國觀に変更した

という事例を手がかりにするならば、そうした改名を申請する資格は全真道士にあるのであって、その対象はモンゴル王廷であることからすれば、尹志平がことさらにそうした申請をおこなった理由として、梁氏一族が全真教教団の宣教事業を支持していたことが推察される。前掲「戈碑」に「沁帥杜德康、平遙帥梁瑜、各施宮觀、一方傾心焉」とある記事とを合わせてもまた、梁氏一族による全真教教団への支持のあつさが伺える。この点に関しては、藤島建樹氏も、梁氏一門が全真教の外護たる存在だと述べるのだが<sup>(18)</sup>、かれらの信心の深さはたんなる外護者以上のものであろう。さらに「太平崇聖宮公據」には、

近蒙掌教大宗師真人師傳、再更為太平崇聖宮名□志端依奉、已於壬子年七月十五日安置牌額、懸掛了當。

という記載が続く。この内容から見れば、太平興國觀は、壬子歳（一二五二）に再び改名され、「太平崇聖宮」と改められた。この年は既にモンケ・カアンの時代であり、尹志平も既に世を去った時代の出来事である。太平興國觀が、一二三五年の尹志平の来訪から一二五二年まで、およそ二十年間残されていたことから、その生命力の強さが伺え、またこの背後には山西梁氏一族の加護が存在していたことが推察される。

梁瑛と尹志平の交流を通して、全真教教団は山西の布教の基礎を定める一方、梁氏一族は、全真教の山西の布教に重要な拠点を提供した。その後、多数の道士が太平興國觀に集まり、モンケ・カアンの時代まで盛んとなり、後に太平崇聖宮と改められるに至った。フビライの時期、全真教は弾圧され、一時的に衰えるのだが、太平崇聖宮が保全され、今でも重要な道觀として残っていることから鑑みれば、太平崇聖宮は全真教の盛衰の証しだと言っても過言ではないだろう。

さて、梁瑛一族による全真教の信奉に関しては、前掲の清代康熙帝時代の『平遙県誌』（康熙四十六年…一七〇七刊）の著者、王綬が、当時の平遙県にある太平崇聖宮の遺跡に遊歴し、残されていた石碑を見たらうえて『平遙県誌』（巻五）「選舉」の最後にこう論じている。

今清和真人（尹志平）、則為長春（丘処機）弟子、伝其祖教、大著宗風、梁氏之盛、皆其門人、余可知矣、……余読元世祖詔長春（丘処機）書、知信從之篤、非偶然者、今觀中断碣殘石、猶可考証。一時化導功力、上下景從、助帝王刑政之所不逮、安得謂非有道仁人者哉。

王綬が全真教を高く評価し、梁氏一族が、すべて尹志平の門人であったと記される点に注目したい。その信仰のあかしが、太平崇聖宮の遺跡に残されていた



石碑なのであった。また、清代光緒帝時代の恩端が平遙県清虚観の清和真人画像を見て彼が著した『平遙県誌』（光緒九…一八八三刊）巻十「古跡」にも、

清和真人畫像在清虚観、後書達魯花赤与梁、杜諸公及夫人、子孫姓名甚多、夫人皆受教、各有法名、元世之崇信道教如此。

とある。梁瑛一族と前掲の杜豊一族はともに全真教を信奉し、教えを受け、法名も持っていた。前掲の山西の在地の世侯と全真教教団との交流の史料から見れば、これもまた世侯が全真教を信奉していた明確な記載である。また、右に見える「元世之崇信道教如此」という一句は、当時世侯たちが全真教を盛んに崇敬していた状況を、包括的に伝える表現であろう。

### 3、平陽府李侯

『元史』卷一五〇「李守賢伝」には、

李守賢、字才叔、大寧義州人也、……金大安初、守賢既兄庭植、弟守正、守忠、從兄伯通、伯温、歸款於太師國王木華黎、入朝太祖於行在所、即命庭植為龍虎衛上將軍、右副元帥、崇義軍節度使、守賢授錦州臨海軍節度觀察使、弟守忠為都元帥、守河東。朝廷以全晋為要害之地、人心危疑未定、

非守賢鎮撫之不可、乃自錦州遷河東南路兵馬都總管。既至、河東人皆曰「吾等可恃以生矣。」歲戊子（一二二八）、朝於和林、加金紫光祿大夫、知平陽府事、兼本路兵馬都總管。

という記載がある。そこでこの内容から見れば、乙未の冬、尹志平を大勢の属官とともに出迎えた「平陽府李侯」とは、この李守賢であることがわかる。李守賢は愛宕氏の「漢人世侯分布表」には入らないものの、藤島建樹氏が、その論文において李守賢一族の経歴に言及し、彼らは「モンゴル政権下で活躍しており、モンゴル政権の華北支配に協力した小軍閥、即ち漢人世侯であることは明白である」と指摘しているとおりである<sup>(19)</sup>。李守賢は大寧義州（今の遼寧錦州）の出身であり、また多くの世侯たちと同様、金末の乱世の中で、生きるためモンゴル軍に投降した。李守賢は真定史氏と同様に兄弟と共にムカリに降参し、そして皆それぞれ職を授けられ、李守賢も「錦州臨海軍節度觀察使」という軍政権を備える職を授けられたのである。

山西地方は軍事上の要害であり、そこで李守賢は「河東南路兵馬都總管」へ遷されたが、その時に言ったかれの「吾等可恃以生矣」という一句からは、軍政長官としての彼の重要性がうかがえる。オゴダイ・

## 4、忻州張侯

カアンの時代に入ると、彼は再び新たなモンゴル大カアンを拜謁し、今度は「金紫光祿大夫、知平陽府事、兼本路兵馬都總管」という一連の爵位と官職を授けられ、本格的にモンゴル分封体制に入った。そうして彼は、軍事、行政、世襲という三つの権力を備え、正式に一地方の世侯に成長したといえる。

さて、世侯としての李守賢は、尹志平の来訪に対しては極めて行き届いており、前掲の李碑に

（乙未歲、一二三五）是冬、平陽府李侯率僚屬車馬來迎、請演教於長春觀。官民寓庶、日送供者、旁午於道：

とあるように、自ら尹志平を出迎えるとともに、全真教掌教の教えを聴こうとする人士は、「日送供者、旁午於道」とあるように活況を呈したようである。この事柄の裏には李守賢を含むモンゴル帝国の官僚たちにとっても、尹志平の来訪が何よりも重大な事であり、全真教への崇敬の姿勢がうかがえるだろう。さらには、李守賢の息子である李穀も全真教教団の布教を保護しており、前掲の『山右石刻叢編』卷二四は「創修長春觀記」という碑文を収録し、李穀が長春觀の創立に援助したことを述べている<sup>(20)</sup>。こうした史実を総合するならば、世侯である李氏一族もまた全真教教団を支持する人々であったとみなせるだろう。

前掲の李碑には、「是時忻守張侯、自出己財、独建重陽觀」という記載がある。つまり「忻守張侯」は、自分の財力で重陽觀を建て直すほど、全真教に対し、全面的な支持を表明していたのである。『山右石刻叢編』卷二四（『歷代碑誌叢書』第十六冊、四十卷、江蘇古籍出版社、一九九八、清光緒二十七年（一九〇一）刊本が底本）には「州將張侯墓表」という一文が収録され、そのなかには、張安寧の墓碑は定襄県邢村に立てられているとの記事がある。『山右石刻叢編』の編者である胡聘之は、この墓碑と墓表に対して考証を行い、墓碑の寸法を記録した。その考証によれば、張安寧は「九原府定遠大將軍、總管、大元帥」に授けられたことが分かる。胡氏はさらに、『定襄県志』や王槃の「郝和尚碑」、『元史』の記事を証拠に挙げ、忻州は戊子歳（一二二八）の年に九原府に改められたとも考証した。<sup>(21)</sup>

一方、民国学者、牛誠修は彼の編集した『定襄金石考』（四卷、北京圖書館出版社、二〇〇三、民国二一年（一九三二）雪華館版刊本が底本）の中で、忻守張侯は張安寧であると明言している<sup>(22)</sup>。定襄は忻州に隸属し、張安寧以外の人が九原府大元帥に委ねられた



記載は皆無であることから、以上の考証や記載を総合して、忻州は戊子歳（一二二八）の年に九原府に改められ、この時に張安寧は「九原府定遠大將軍、總管、大元帥」になったということが分かる。尹志平の山西布教は乙未歳（一二三五）のことであり、したがって、尹志平が忻州に到着したとき、張安寧は既に九原府大元帥という忻州の最高軍政長官であった。「忻守張侯」とは、まさにそうした張安寧のことを指していると考えられるのである。

張安寧の経歴に関しては、すでに瞿大風氏が明らかにしているとおりであり、かれもまた漢人世侯の一人である<sup>(23)</sup>。右の「張安寧墓表」によれば、彼もまた李守賢のように金末のモンゴル軍の侵攻から生き残るため、郷里の民衆を集めて自衛し、一地方の豪傑になり、最後にモンゴル王廷に降参して忻州の最高軍政長官になったことが分かる。ただし愛宕氏の「世侯分布表」にかれは入っていないのだが、彼は前掲の世侯と同様の履歴をもつとともに、在地の有力者でもあり、彼の息子、張仁傑、張才傑もそれぞれ忻州の長官に任じられており、かれらを世侯の看做す判断はあやまりではない<sup>(24)</sup>。

張安寧が尹志平の山西布教を支持した史実に関する前掲の「自出己財、独建重陽觀」という記載につき、

『定襄金石考』は、元憲宗モンケ・カン時代<sup>(25)</sup>の全真教門人、馮志亨が撰した「創建重陽觀記」という石刻史料を収録する。また王宗昱氏も『金元全真教石刻新編』（北京大学出版社、二〇〇五）において同碑を校勘のうえ、収録した。校勘に際してのかれの考証は以下のとおりである。

碑连額高九尺九寸、广三尺四寸。三十行、行五十六字。字径一寸、正書。額題「創建重陽觀記」六字、篆書。今在大南邢村三聖寺……（尹志平）乙未（一二三五年）春西行、道出忻界。太守張侯聞之、出境遠迎、稽首而告曰、累年從軍、脱万死一生之地、又值玄門大辟、得聞正教。向舍所居之宅、改為觀宇、立聖像、增寮舍、使之道侶修香火而安居处矣、……師（尹志平）以是觀地当冲、過客旁午、賜号曰通仙……未幾、侯果棄官入道、莫知所之。

即ち尹志平が忻州を出たときに張安寧は彼を出迎えるに來たのであり、自分の住宅を寄付して全真教の宮觀に改めると決心し、尹志平からは「通仙觀」という号を受けた。つまり、戦争に明け暮れる世の中から精神的にだけでも超脱すべく、心から全真教を信じていたことがわかる。引用文末尾の「未幾、侯果棄官入道、莫知所之」という句は、そうしたかれの願望のあらわ

れであったと思われる。ただし前掲の「張安寧墓表」は、張安寧が官職を辞めて入道したことを記しておらず、賢者と交流することを好んでいたと述べるだけである<sup>(25)</sup>。

また、この石刻の最後には、張安寧一族、彼と弟および息子である張仁傑などが重陽觀を修復し寄付したことにより、「功德主」という肩書きを受けて名前が刻まれている。したがって、張安寧も前掲の世侯たちと同じく、家族一門で全真教を護持して、全真教を信じていたと言える。

## おわりに

十三世紀前半はモンゴル帝国の勃興期であり、全真教の勃興期でもある。かりに、開祖王重陽が全真教発展のために種を蒔いたと喩えるならば、長春真人丘処機はこの種を発芽させ、清和真人尹志平は丘処機の「積功累行」の志を継承してこの芽を成長させ、実をつけさせたと言える。全真教教団は尹志平の指導の下で新たな局面を迎え、山西地方を中心にして教線を拡張した。その裏には山西の在地の世侯の支持が存在している。本稿は従来の研究に見逃された杜豊一族、梁瑛一族、李守賢一族、張安寧一族という一連の山西地

方の在地世侯が、尹志平の宣教を支持する史実を明らかにするとともに、彼らの世侯である身分をも解明し、また彼らの支持の重要な面である全真教信仰に関して論及した。彼らの支持は単に金銭的な援助という性格のものではなく、全真教を信奉するという精神的な援助でもあり、この両側面はかたく結びついていた。要するに、彼らは全真教教団の山西地方の布教に大いに貢献した。彼らの全真教信仰こそが、尹志平の事業を支持した原動力なのである。

## 注

(1) 趙衛東氏は『金元全真道教史論』（齊魯書社、二〇一〇）において、王処一が金世宗に二回、章宗に三回招かれた経緯を詳細に論じたうえで、そうした招聘ののち全真教教団の合法性が認められ、丘処機が金朝に招かれる基盤を作ったと推察する。

(2) 愛宕松男「李璫の乱とその政治的意義―蒙古朝廷下における漢地の封建制とその州県制への展開」（『東洋史研究』六―四、一九四一）。氏は「金既播汗、太祖徇地。北人能以州県下者即為守令。僚屬聽自置、罪得專殺。」

〔元〕姚燧『牧庵集』卷三十五「滄陽高氏墳道碑」と「國家當肇造際、所在豪傑応期效順、昇世侯豐將、鎮據一方、父死子繼、兄沒弟及。」〔元〕王惲『秋澗集』卷五十七「王遵神道碑」と「吾朝以神武起北方、幽燕以南風從雲會、功成事定、剖符錫命、列為侯伯、連城數千、

戸数十万、租賦焉生殺焉、一出於侯伯。」「〔元〕胡祇通『紫山集』卷八「慶博州趙總管致仕還鄉八秩詩序」といった記載などにより、「漢人世侯」の具体像を明らかにするが、その定義は明示しない。もちろんこれらの記載からでも、世侯の基本的な性格は析出できるのであり、本稿では、世襲的な封建領主であり、同時に管民官として享有した生殺与奪の権力と僚属が自由に任命できるという「封建性」と軍事将領として兵力を率いることができる「軍事性」という二つの属性を、「世侯」であるかどうかの判定基準だとする。

- (3) 池内功「モンゴルの金国経略と漢人世侯の成立」『四国学院大学論集』四国学院大学文化学会一九八〇(四六、四八、四九)、一九八一。

- (4) 符海潮氏は『元代漢人世侯群体研究』(河北大学出版社、二〇〇七)において漢人世侯を「万户、世侯、漢軍、漢人地主武装」と定義し、それぞれの意味は同一だと考え、胡小鵬氏は「窩闊台汗己丑年漢軍万户蕭札刺考辯——兼論金元之際的漢地七万户」(『西北師大学報』六、二〇〇一)において漢人世侯を「漢軍万户」と定義し、モンゴルの軍事制度のもと漢人を編成した軍隊と説明した。

- (5) 藤島建樹「全真教の展開—モンゴル政権下の河東の場合」(秋月観暎編『道教と宗教文化』平河出版社、一九八七)。

- (6) 瞿大風『元朝時期的山西地区』(遼寧民族出版社、二〇〇六)、王霞蔚「金元以來山西漢人世侯の歴史変遷—以平遙梁瑛家族為例」(『中国社会歴史評論』一二、二〇一一)。

- (7) 四つの碑文の撰述年に関してはそれぞれの碑文に明記

される。戈穀碑はその碑末に「(元世祖)至元元年十月(一二六四)、賈有或 碑はその冒頭に「(元世祖)至元二十七年(一二九〇)、王惲碑はその最後に「(元成宗)元貞二年(一二九七)、李志全碑はその碑末に「(元仁宗)延祐元年(一三一四)」と明記される。

- (8) 原文「及濰陽、謁師於玉清之丈室：從容語及詔旨、師大喜曰、將以斯道覺斯民、今其時矣。遂偕往、覲長春真人於萊州昊天謁。先是金宋聘命交至、皆不応、至是長春与師議、決計北上：」(「元」李道謙『終南山祖庭仙真内伝』卷下、「清和真人」『道藏』第一九冊)。

- (9) 原文「壬辰(一二三二)、帝南征還、師迎見於順天、慰問甚厚、仍令皇后代祀香於長春宮、賜寶優渥。甲午(一二三四)春、遊毋間山、太玄觀之李虛玄語人曰、去年院中青氣氤氲者曩日、占者以為当有異人至。今師來、既驗矣。瑜春南歸、及玉田、衆喜、為數日留。日已哺、遽促駕兼夜行五十余裏、舍豐草中、衆莫知所以。後還宮、始知在玉田時、有寇数百欲劫掠、追至大甸、不及而反。從者相賀曰、非師奈我輩何、時皇后遣使勞問、賜道經一藏。」(弋穀撰「清和妙道広化真人尹宗師碑銘並序」『甘水仙源録』卷三)『道家金石略』も同記を収録しており、本稿は『甘水仙源録』に従う。

- (10) この聖旨は山東濰縣全真派の玉清宮に立石された。馮承鈞氏はこの碑を見て、それが一二三五年に発給されたものであることから「一二三五年聖旨」と命名し、「元代白話碑」(『馮承鈞西北史地論集』、中国国際広播出版社、二〇一三)に収録した。この点に関して、氏は以下のように述べる。「皇帝聖旨、道与清和真人尹志平(按)処機没於一二二七年、志平繼之管理道教。事見『元史』卷

二〇二）、仙孔八合識李志常。我於合喇和林蓋觀院來、你每揀選德行清高道人、教就來告天住持。仰所在去処齋発遞送來者。准此。乙未年（一二三五）七月初九日。」

(11) 彼らの名前は愛宕松男氏の「漢人世侯分布表」に入っており、彼らの世侯としての身分が確認できる。また、藤島建樹氏も前掲「全真教の展開―モンゴル政権下の河東の場合」において「朝元觀記」の記載を検討し、彼らの外護者の身分を提示した。

(12) 蔡美彪『元代白話碑集録』（科学出版社、一九五五）は「漢子正書、末附蒙古畏兀字三行、在河南省濟源県」と述べる。

(13) 『葆光集』序。（『道藏』第二五册、文物出版社、上海書店、天津古籍出版社、一九八七年合同影印版）

(14) 「元」李志常『長春真人西遊記』卷上（王国維 校本）は、「二十二日、至盧溝、京官、士庶、僧道、郊迎。是日、由麗沢門入、道士具威儀、長吟其前。行省石抹公館師於玉虛觀、自爾求頌乞名者日盈門。凡士馬所至、奉道弟子以師与之名、往往脱欲兵之禍、師之追蔭及人如此。」と記す。丘処機は一二二〇年から一二三三年にかけての「西遊」の途中で燕京行省長官石抹威得トに大いに歓迎されるのだが、この文章は、その場面が壮大であることを示している。筆者は尹志平の平遥宣教がそれと類似しており、彼は丘処機のことを模倣しようとしていたと考える。

(15) 原文「未達難通天令、誰解動中生靜。道在有無間、隔千山。去住絶疑心定、任運逍遙隨命。終日不迷南、更合参。」（尹志平『葆光集』卷下）。

(16) 原文「公諱秉鈞：生子七人、長曰瑜、次曰孜、三曰瑛：

瑜性行亦純厚、其貌魁然、二十四歲為本邑令：壬寅六月十二日、因疾卒於官：三子瑛：知公有深謀遠算、又善於用兵、故授以万户之職……。また「故征行都元帥五路万户梁公神道碑名」（「元」魏初『青崖集』卷五）にも「丁未（一二四七）、公年五十有七、告老不允、詔公充西京、平陽、太原、京兆、延安五路万户」とある。

(17) 「明」宋濂等著『元史』卷一六四「梁瑛伝」中華書局、一九七七。

(18) 前掲藤島氏論文、参照。

(19) 前掲藤島氏論文、参照。

(20) 「創修長春觀記」の最後に「都會首平陽路兵馬都總管李」という名前が記される。陳垣『道家金石略』は、この「總管李」を李穀に比定する。

(21) 原文「定襄県誌、張安寧、南邢村人、元初開国、授九原府定遠大將軍、總管、大元帥。据王檠郝和尚碑、忻州、戊子歲升九原府。元史郝和尚巴圖傳、戊子、為九原府主帥。則忻州實以皇子圖類監国之年升府。」（「清」胡聘之『山右石刻叢編』卷二十四「州將張侯墓表」）。

(22) 原文「張侯即張安寧。遺山「州將張侯墓表」不言入道事、專重其功。」（「民国」牛誠修著『定襄金石考』卷二「張安寧墓表」）。

(23) 瞿大風「金元之際山西的漢人世侯」（『蒙古学信息』二、一九九九）。

(24) 「州將張侯墓表」および「清」王時炯『定襄県誌』（雍正五年本、卷六、人物志）も参考になる。

(25) 原文「雖大夫士之篤于好賢者、不如是之備也」（「清」胡聘之『山右石刻叢編』卷二十四「州將張侯墓表」）。

## 尹志平时代全真教的扩张

### ——以与山西地区的世侯的交往为中心

孙      翔   宇

创立于十二世纪中叶的全真教在历经开祖王重阳，马钰，谭处端，刘处玄以及丘处机以后教团取得了一定的发展，到了第六代尹志平担任掌教的时候，他在继承前代掌教丘处机的遗志与成果，获得了当时正在兴起的蒙古帝国的支持之外，通过加强与蒙古王室之间的联系，尤其是与蒙古帝国的汉人地方武装领袖，即所谓的世侯的交往，使得教团势力更进一步扩张，教团得到进一步发展。本文以尹志平 1235 年的山西传教为中心，通过探讨他与山西当地的世侯的交往，来体现全真教的发展离不开世侯的支持，同时对世侯的全真教信仰进行了推断。序文主要对研究背景进行了介绍，具体介绍了有关世侯和全真教相关研究的现状，同时提出所要研究的问题。第一章第一部分主要介绍了尹志平的生平以及他与全真各掌教的关系，尤其是对他与丘处机的关系进行了分析，强调他继承了丘处机“积累功行”的思想和志向。第二部分则介绍了尹志平与蒙古帝国王室之间的紧密关系。第二章详细研究了尹志平与山西地区世侯的交往，通过现存的全真教碑文，分四个部分，研究尹志平与平遥世侯杜丰一族，世侯梁瑛一族，平阳世侯李守贤一族以及忻州世侯张安宁一族的交往，分析各个家族的背景，考证碑文中有关各家族如何支持尹志平传教的记载，同时解读有关他们对全真教信仰的记载。最后，通过以上分析，在结论部分来说明他们对尹志平的山西传教提供了帮助与支持，而且不单是个人，他们一族都对全真教的发展提供支持，同时这种支持反映出他们崇奉全真教，他们对全真教的崇信是他们支持尹志平的山西传教的原动力。